

「それでいいのか!」

任職

(お彼岸法要の法話より)

「死ぬのか」と思いました。突然のことです。頭にワレるような痛みをおぼえ、心臓は異常に高鳴る。いつもと違う体の異変。

はじめてのことで、「頭の血管が切れたのか、これで終わりか、このまま死ぬのか、半身不随になるのか」などと一瞬思いました。

それはお参りの帰り道でおきました。お参りの時乗っている単車が細い坂道になっているところ、倒れそうになり、それを起こそうとしていきんだ時です。後から思うと力を入れすぎて、血圧が



一気に上がつたことによるようです。

この世のことは時間の流れとともに変化してゆきます。人生は縁によってなりたち、縁によって変わるもの。このことを忘れて「若いときはこんなんではなかったのに」と愚痴るわたしがいます。

しかし「昔はこうだったのに、ああだったのに」と若いときのことをいくら言ってみても昔の自分には戻れない。残念がるのではなく、「この世のことはすべて無常である」と説かれている仏さまのお言葉をいただく、今の現実をしつかり受け止めさせてもらうことが肝要と改めて実感しました。

山口で短大の先生をしておられた河村とし子先生が、ご自身の姑さんのことを話しておられます。

姑さんは朝おきるといつも「きょうも目が見えてくださる。手が動いてくださる。なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」と老いの身を喜び、「ないものを欲しがるより、あるものを喜ばせてもらおうよのう。なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」と独り言を言われていたそうです。

わたしたちは目が見え、手足が動いて当たりまえと思いいいらないだろうか。老いることも死ぬことも決まっていることなのにそれを忘れ、

(前ページの続き) 今、ここに生きて  
いることの不思議さを喜ぶこともせず、  
ないものばかり求め続けていないだろう  
か。あさましいばかりです。

また、「生まれるときにはなんの注文  
もつけずに生まれてきた自分だから、今  
の自分も、現に今、この自分として生ま  
れてきたと受け取ればよい。本日ただい  
ま誕生。本日ただいま誕生」と申されて  
生き抜かれたお方もおられます。戦後シ  
ベリヤに抑留されて、足を凍傷で失った  
にもかかわらず、托鉢しながらの生活で、  
残された人生を力強く過ごされた小沢道  
雄さんです。

「現実の境遇に不足不満をいうだけで  
は、人生を自分で潰してしまっているの  
ではないか。それでいいのか」と、この  
お二人はわたしたちに問いかけておられ  
ます。

## 親鸞聖人 七五〇回 大遠忌 によせて

住 職

**問** 西本願寺において来年の春から親鸞  
聖人の七五〇回大遠忌法要が勤められ  
るとお聞きしましたが、どのような法  
要でしょうか。

**答** 親鸞聖人の七五〇回目の「命日」を  
縁とした大きな法要です。

**問** 「命日」とはどういうことですか。

**答** 「命日(めいにち)」とは故人の死亡  
日に相当する月々のその日をいいま  
す。

命がなくなったという意味の「捨命日  
(しゃめいにち)」の略語です。

またこれを「忌日(きにち)」、または  
「不楽日(ふぎょうにち)」ともいいま  
す。

**問** なぜ「忌日」とか「不楽日」という

呼び名がついたのでしょうか。

**答** 「忌」とは、「避ける」こと。故

人の死亡の日は、死者の生前を追  
懐して、花見遊山などの気ままな  
遊び事を忌み、慎むべき日である  
からです。自己の本能的な行為を  
慎み、亡き人を偲ぶことを通して、  
仏のお心を受け止めさせていただ  
く法要の日ということですが。

**問** その命日をなぜ「大遠忌(だいお  
んき)」というのですか。

**答** 死後七日ごと七七日まで法要を  
「中陰法要」、百日目を「百ヶ日  
法要」、さらに月々の忌日を「月  
忌」といいます。

また、死亡された翌年以後は、  
毎年の忌月忌日を「祥月命日」と  
いい、一周忌、三回忌、七回忌、  
十三回忌、十七回忌、二十五回忌、  
三十三回忌、五十回忌となります。

それ以後は、五十年ごとに勤められます。一般的には五十回忌で終わりますが、宗祖聖人、中興上人、および重要な先徳などの忌日に勤められています。これは「遠く遺徳を追慕する」という意味で、遠忌（おんき）といえます。

浄土真宗の宗祖であります親鸞聖人の場合限り、「大」をつけて「大遠忌（だいおんき）」と称しています。

**問** 信行寺さんでは、昨年、西本願寺よりも先に勤められました。なぜ七五〇年も前に亡くなられた人の法要を勤めるのですか。

**答** 親鸞聖人の説いてくださった阿彌陀さまの教えは、今もわたしたちの人生に生きています。親鸞聖人への感謝の思いから勤めるのです。

**問** 「感謝の思い」といいますと、「報恩講」と同じ趣旨の法要ですか。

**答** そうです。「報恩講」は、毎年全国各地津々浦々の浄土真宗のお寺や家庭な

どで勤められています。

これはすごいことです。親鸞聖人はわたしたちにそれだけのことをしてくださっているのです。

人は二度死ぬと言っているでしょう。この世には、五十年ないし百年の与えられた寿命分か生きておれません。必ず死にます。

しかし、死んだ後だけだけ生きられるかが問題です。つまり、「この世に生きている人々の心に、どれだけ生き続けられるか」です。

親鸞聖人がこの世でなされた仕事は、死んでからなお七五〇年も、わたしたちの心に、わたしたちの人生に生きていくということです。わたしたちの家庭でも同じことです。親や家族の命日に法要を勤めさせてもらうのも同じことです。この世に生まれてきて、家族として出会った縁の深さを、また、この家族に支えられて、今ここに生

きている現実を忘れたなら、人間であることを忘れたのも同じです。

不思議としか言いようのない出会いをしたのです。その人がこの世を去られても、この世に生きておられたときと同じ家族なのです。その意識のなかで「命日の法要」は勤められてきました。

いろんな面で、人と人とのつながり、家族のつながりが希薄になりやすい社会状況になってきているように感じ、さみしく思います。

あなたはこのことをどう思われますか。



以前から、一度読んでみたいと思っていた本に「くじけないで」という詩集がありました。ベストセラーになったというので知ってる方もおられることでしょう。なんでも、著者の柴田トヨさんは来年で百歳になられるという事です。

そんな高齢の方がいったいどのような詩を書いて、多くの読者の心を感動させるのでしょうか。

実際に本を手にとりますと、トヨさんの感性のみずみずしさに驚きました。

「生きる力」

九十を超えた今

一日一日が

とてもいとおしい

頬をなでる風

友からの電話

訪れてくれる人たち

それぞれが

私に

生きる力を与えてくれる

毎日の暮らしの中で、今日一日を、いとおしく感じながら生きておられるトヨさん。

詩を書くようになったのは九十歳を超えて、日本舞踊が踊れなくなつてから。息子さんのすすめで始められたそうです。

そして、「どんなに辛いこと、悲しいことがあっても、私は両親や夫、倅、嫁、親戚、知人、そして多くの縁ある方々の愛情に支えられて今の自分があるんだということ」に詩を通じて気づいた、と言われます。

仏教でも「縁」というつながりの大切さを説きます。私の存在は自分の家族や友人をはじめ、直接知らない世界中の様々な人々や動物、草木や山川など多くの存在に支えられています。宇宙全体が網の目のようなつながりによつて相対的になりたつているのです。ですから、自分一人では存在できないのです。

さらに、生きとしいけるものは

全て、幸せを望んでいます。自分一人だけが幸せになるというのも、道理からはずれているのです。

「幸せ」

今週は

看護師さんにお風呂に

入れてもらいました

倅の風邪がなおつて

二人でカレーを

食べました

嫁が歯医者に

連れて行って

くれました

なんて幸せな

日の連続でしょう

手鏡のなかの私が

輝いています

周りの人に支えられている自分に気づくとき、日常のささいな出来事が、そのまま幸せな人生なんです。

人間は、そういうあったかな心の通  
いが必要で。いくら物質的な豊かさ  
で身を喜ばせても、それだけでは心の  
平安は望めません。

### 「貯金」

私ね 人から  
やさしさを貰ったら  
心に貯金をしておくの

さびしくなった時は  
それを引き出して  
元気になる

あなたも 今から  
積んでおきなさい  
年金より  
いいわよ

トヨさんの詩のテーマの中には、母親  
や息子さんなど家族とのやりとりがよ  
くでてきます。

そのなかに、亡くなったご主人の命  
日に息子さんと話した内容を思い出し  
ながら作った詩があります。

### 「命日に」

あなた  
夢を見ました  
健一に話したら  
俺も会いたかった  
そう言つてました  
よく親子ゲンカ  
してましたね  
私 おろおろ  
するばかりだった  
今 やさしく  
してくれますよ  
二人で詩を作ってるの  
あなたも  
参加しませんか

こうやって、かえって亡くなった  
後に心通わす世界も、確かにある  
のでしよう。

特に、母親との思い出は鮮明に  
描かれています。もうすぐ百歳に  
なるうとするトヨさんの綴る詩を  
読んで、人は幾つになっても母親  
のぬくもり、愛情を忘れないもの  
なのだ、と思いました。

### 「さびしくなったら」

さびしくなったら時  
戸の隙間から  
入る陽射しを  
手にすくつて  
何度も顔に  
あててみるの

そのぬくもりは  
母のぬくもり  
おっかさ  
んがんぼるから  
ね  
眩きながら  
私は立ちあがる

トヨさんは、どんなにひとり  
ぼっちでさびしくても、こう考  
えるようにしています。

「人生、いつだってこれから。だ  
れにも朝はかならずやってくる」



門信徒会の会長をしてくださっていた谷川俊雄様が、さる九月二十九日、行年八十九歳で往生の素懐をとげられました。

谷川様は四十年來、当寺の法座には欠かすことなくお参りくださり、ご自宅でも毎月、家庭法座を開いておられたお方でした。長井輝子さんに谷川様の思い出を書いていただきました。

### 「お浄土へ旅立たれた谷川名誉会長を偲んで」

長井輝子

平成十四年に発足した信行寺門信徒会の初代会長を永らく勤めていただき有難うございました。その穏やかなお人柄は申すにおよばず、毎回のご法座と諸行事には必ずお参りされていました。その聴聞のお姿は、いまでも眼の前に浮かんで消えることはありません。

また、御長男の奥様は現在、信行寺のコーラス部「みやび会」のメンバーとして活躍しておられます。

時あたかも御本山では、親鸞聖人の七五〇回大遠忌を迎える行事でにぎわっていますが、谷川様は五十年前の七百回大遠忌に御本山へ参詣されたと聞いております。三十八歳だったそうです。「この度の七五〇回大遠忌にもお参りさせていただきたいけれど、体のほうがなく」と笑顔で話されたことを思い出しております。

お念仏を喜ばれた谷川様、この度はお浄土の世界でご参詣くださいませ。長い間のご指導ありがとうございます。合掌

## キッズ サンガ NOW

全国の児童に挑戦!!!!

毎年、一月九日から十六日に開催されており、全国児童作品展に、信行寺キッズサンガ（子ども会）のみなさんも書道部門に挑戦しました。

現在、六年生が中心の子ども会。小学生最後の思い出になるように、本年はお寺に集り、提出課題をみんな練習しました。

指導には、間信徒会元役員の方の月田先生にお願いいたしました。

お陰で力作が仕上がりました。来年の一月の御正忌報恩講にあわせて、ご本山の間法会館に展示されますので、お参りの際には、ぜひ足を延ばしてご覧ください。

☆冬休みの子供会も予定しています。

お気軽に信行寺までお問い合わせください。



## 西大谷納骨参拝

多田 文男

十月十七日、今年も恒例の西大谷納骨参拝が行われました。副住職様ご一家と坊守様が先導してくださいました。

西大谷には、私の両親と祖父母の納骨をさせて頂いており、ここ数年、夫婦で毎年参らせて頂いております。今年も秋晴れの良いお天気にも恵まれ、絶好の日和でした。京都までの車中では、丸十年を要したという西本願寺御影堂の修復工事のビデオを見せていただきました。昔の高度な建築技術を伝承しつつ修復するという難しい工事であった様です。

その映像を見て間もなく、西本願寺を参拝したのですが、その伽藍の荘嚴な姿に改めて圧倒され、例年以上に感慨深い思いでした。美しく修復された御影堂では来年、親鸞聖人七五〇回大遠忌法要が営まれます。

引き続き、納骨される方々と一緒に、大谷本廟へお参りしました。私は、ここへお参りするいつも思い出す事があります。それはいつの納骨参拝の時だったか、一緒にお参りをしていた方のひとりが、納骨所の引き出しを覗き込まれて、

「私らの入る場所が、まだあるやろか？ 急がんと無くなりそうやなあ」と言われ、その場が笑いに包まれた事があったのです。

その時に笑顔で応える住職様、坊守様はじめ参加した門徒の皆様のご様子に、ほのぼのとしたなごやかな雰囲気を感じ、自分もそのグループの中のひとりでいる事が、何となく嬉しく思いました。以後、此処へ来ると、納骨壇の引き出しの中が少し気になる自分を笑ってしまうのですが・・・

参拝を無事終え、伏見の酒蔵を改造

した趣のある料理屋さんで昼食を戴き、坂本龍馬ゆかりの寺田屋を見学、その後、親鸞聖人の父「日野有範」のお墓があると伝えられる、宇治の三室戸寺を拝観して帰路に着きました。全員が無事に帰宅し、良い一日でした。

私自身がお寺の行事に参加させて頂く様になったのは、この納骨参拝にお邪魔するようになってからです。

お蔭様で時々ではありますが、住職様、副住職様はじめ諸先生の法話を聴聞し、勉強させて頂くようになりました。「南無阿弥陀仏」を称えれば阿弥陀様が手を差し伸べてくださると勉強しましたが、早速、阿弥陀様が皆様の手を借りて、手を差し延べて下さっている様に思えます。

## 信行寺行事予定とご案内

### 報恩講法要

十二月十八日(土) 住 職

十九日(日) 赤山得成先生

二日間ともに午後二時より四時までです。ご都合の良い日に合わせて、一日でもお参りください。

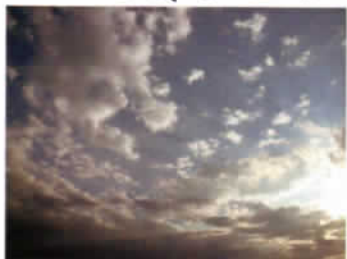
### 新春初法座

平成二十三年

一月五日(水) 午後一時より

お正月をお寺で楽しく迎えましょう

お勤め、法話の後、みなさんで楽しく語らいながら、ご馳走をいただきます。(お世話の方々が手作りのおいしい料理を持ち寄ってくださいます。)



### 編集後記

あれほどに夏が暑い暑い!と言っていましたのに、やっと涼しくなった、と一息ついておりましたら、もう冬の始まりとなりました。

冬が近づき、一年の締めくくりになりますと、日に日に陽の沈むのも早くなります。そんな折、暖を取りながらお世話になった、あの方この方と想いを馳せるのもいいものです。

日頃、有縁の方々にお世話になっておりましたが、ご無沙汰ばかり...お歳暮?年賀状?それも大切ですが、ご恩を頂き素直に感謝すること。しかし、簡単なようで、なかなか出来ないことです。

一般的に「恩に報いる」とは、相応のことを返す、という意味だそうですが、真宗でいう「報恩」とは、阿弥陀様の御恩を知り感謝すること。

素直な喜びを伴った感謝にまさるものはないでしょう。

お寺に嫁いだから「なもあみだぶつ」

は「ありがとう」なのですよ、と教えて

頂いた時の嬉しさが、今日の私を導いて

くれています。だから、子供会の皆には、

いつもそのことをお話しして、手を合わせて

もろうようにしています。親への御恩、仏さまへの御恩、たくさん御恩

に包まれていることに目を向けて

「ありがとうございます。」といただきましょう!

今年も「報恩講」の季節になりました。どうぞ、ご家族・ご友人と、お誘いあわせて、お参り下さい。

(米田悦子)

